

春爛漫、笛吹市は一年で一番華やかな季節を迎えました。4月15日に執り行われる大神幸祭は「ソコダイ」の掛け声とともに神輿が甲府盆地を東西に横断していき、盆地全体に春を広げていくかのごとくです。笛吹市探訪では市内の武田氏関係の史跡・文化財を紹介していますが、今回は大神幸祭に関連する武田信玄ゆかりの文化財を紹介します。

「おみゆきさん」として親しまれる大神幸祭は、甲斐国の一宮浅間神社（笛吹市一宮町）、二の宮美和神社（笛吹市御坂町）、三の宮玉諸神社（甲府市国玉）の三つの神社の神々が釜無川左岸の三社神社（甲斐市）へ神輿でお渡りになり（これを「神幸」といいます）、川除（水害除け）の神事を行うお祭りです。甲斐国は昔から水害に悩まされた地域で、「延喜式」という平安時代の文献には全国でも珍しく「堤防料」が支出されていたことが記されています。天長2年（825）に甲斐国が度重なる洪水に悩まされている様子を国司の文屋秋津が朝廷に報告したところ、朝廷から勅使が派遣され三つの神社による大神幸祭が行われるようになったといわれています。

戦国時代になって武田信玄も治水に

笛吹市探訪

シリーズ
第25回

武田氏と笛吹市③

－武田信玄と大神幸祭－



紺紙金泥般若心経(浅間神社)

は大変な力を注ぎ、信玄堤をはじめとした様々な水防施設を造りました。川除の神事が行われる三社神社はこの信玄堤にあるため、信玄も大神幸祭に力を入れていた様子がうかがわれます。浅間神社には年2回の神幸（江戸時代までは十一月に「冬神幸」も行われていました）の後と年始には甲府の館へ出仕するようにという信玄の命令文が残されています。

このように甲斐国を悩ませていた水害を防ぐための大神幸祭を行っていた神社に対する信玄の信仰は篤く、数々のゆかりの品が奉納されています。

浅間神社には天文19年（1550）に時の後奈良天皇の筆による「紺紙金泥般若心経」を奉納しました。これは天皇が戦国の世を憂えて、般若心経を自ら写経して全国のおもだった社寺に奉納し平和を祈念したものです。24カ国に奉納されたと記録がありますが、現存するのは甲斐を含め7カ国分だけです。信玄は自筆の包み紙を付けて浅間神社に奉納しました。また、奈良県の長谷から移植した桜を奉納した際に詠んだ和歌の短冊も残されています。

永禄元年（1558）には信玄が大檀那となって撰社山宮神社の本殿を再建しています。これは現在市内に

残されている数少ない中世建築です。美和神社には永禄6年（1563）に長男の義信と連名で板絵の三十六歌仙図、永禄9年（1566）に朱札紅糸素懸緘胴丸という鎧を奉納しています。この鎧は朱漆で塗られた小札という小さな板を、紅糸で綴ったいわゆる「赤備」となっています。少し小さく子供用であるため、信玄の元服の際に使われたともいわれています。

大神幸祭は明治になると一宮の浅間神社だけで行われるようになりましたが、平成15年に三つの神社による御幸が復活し、昔と同様に盛大に執り行われるようになってきました。



おみゆきさん



朱札紅糸素懸威胴丸 (美和神社)